

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370304

研究課題名(和文) 16世紀イングランドにおける枢密院顧問官の詩人庇護に関する歴史的研究

研究課題名(英文) A Study of Privy Councillors' Literary Patronage in Sixteenth-Century England

研究代表者

井出 新 (Arata, Ide)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：30193460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究課題では、枢密院顧問官ニコラス・ベーコンが大学学寮などに対して奨学金や寄付金という形で与えた庇護の実態と、それによって形づくられることになる文人のネットワークについての解明がなされた。とりわけベーコンが文人クライアントを育成するためにケンブリッジのコーパス・クリスティ学寮に設けた奨学金制度に関する一次史料を基に、ベーコンが庇護した学寮の文人や詩人たちのネットワークを再構築した。その結果、従来の文学研究者が着目してこなかった人脈ネットワークの広がりや継続性、或いは詩人の創作に対する影響力を検証し、庇護制度の総体を浮き彫りにした点が、本研究の大きな成果である。

研究成果の概要(英文)：This study focused Sir Nicholas Bacon's patronage to his college scholars and fellows. By highlighting the documents relating to Corpus Christi College Cambridge, in particular, it revealed the mutual interdependence of his students, who had literary ambition and allied themselves with other members of adjacent chambers and colleges, with magnates of municipal corporations, and, furthermore, with government officials at court.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 イギリス史 イギリス・ルネサンス演劇

1. 研究開始当初の背景

16世紀イングランドの権力中枢を担っていた枢密院顧問官のパトロネッジに関する研究の嚆矢は Eleanor Rosenberg の古典的名著 *Leicester Patron of Letters* (1955) に遡る。Rosenberg は顧問官 Robert Dudley に献呈された数多くの書物を分類し、いかに彼の庇護が当時の文化人の広範囲に及んでいたかを明らかにした。その後 1980 年代の新歴史主義擡頭により、詩人や劇作家のパトロネッジに関する研究はさらに盛んになり、Guy Fitch Lytle 及び Stephen Orgel による代表的な研究 *Patronage in the Renaissance* (1981) から近年の Paul Whitfield White 及び Suzanne R. Westfall による *Shakespeare and Theatrical Patronage in Early Modern England* (2002) に至るまで、数多くの成果が発表されている。とりわけ枢密院庇護に関して言えば、White と Westfall による前掲書において、顧問官 Charles Howard の演劇庇護について論じた Andrew Gurr の論文が目新しい。しかしながら、枢密院顧問官或いはその集合体としての枢密院が詩人や劇作家にどのような恩恵を与え、また逆に拘束を課していたかという具体的な実態となると、いくつかの例外を除けば、史料の僅少さ故に殆ど解明されてこなかった。Gurr の論文でさえも、ロンドンにおける商業劇団の庇護や統制の記録から Howard の庇護方針を類推するだけにとどまっている。

そこで本研究が目指したのは、全体的な輪郭の把握ではなく、むしろ個別的事例を具体的に考察することであった。つまり、これまでパトロネッジに関する史料として扱われてこなかった一次史料を丹念に掘り起こしながら、枢密院の庇護という角度からその史料を再検討し、枢密院庇護の実態に光を当てる史料として読み直すこと、またそれによって枢密院とクライアントとの信用に基づく継続的な関係性を再構築することである。そうした試みの有用性を本研究代表者が示したのは、『シェイクスピアと演劇文化』(研究社、2012年)所収の論文「パトロンとしての枢密院」においてである。これは Christopher Marlowe に関する事例研究だが、これまでもっぱら評伝の刺激的な素材としてしか扱われてこなかった枢密院会議議事録を様々な史料を参照しながら読み直し、枢密院顧問官がクライアントを巻き込みながら、持続性の高い互恵的なネットワークを構築する有り様を明らかにするものである。勿論、庇護の有り様は流動的かつ個別적であり、史料から再構築された一つの事例をもって枢密院のパトロン制度全体を論じることは極めて難しい。しかし個別的事例研究を疎かにすれば、詳細な枢密院パトロネッジの実態を解明することは困難である。したがって本研究では、一つ一つの事例の積み重ねにより、枢密院顧問官と詩人との関係性の多様なあり方を浮かび上がらせるという手法を採

ることになる。

こうした研究の着想を得たのは、日本学術振興会の科学研究費を受けながらこれまで行ってきたケンブリッジ大学演劇文化に関する研究を通してである。大学演劇は学寮集団或いは同郷出身者の集団によって創出され、運営されるため、必然的に、閉鎖的な大学社会の庇護関係や敵対関係が反映される。そうした庇護関係をつぶさに調査してみると、アマチュア劇作家の教員や学生たちが、地方政治家や枢密院メンバーのパトロネッジのもとで、演劇を政治的な道具として活用している実態や、大学の政治的な演劇文化がロンドンの大衆演劇文化へと接ぎ木される様子が明らかになってきた。

そこで、古文書に埋もれている一次史料から庇護関係の事例を丁寧に再構築することで、従来想定されてきた庇護関係の見直しを迫り、特に枢密院顧問官のパトロネッジに特化していくつかの具体的な事例研究に応用するという着想が、本研究の背景となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、16世紀イングランドの枢密院顧問官、或いはその集合体である枢密院自体が、詩人や劇作家にどのような恩恵を与え(逆に拘束を課し)たか、また枢密院の庇護がどのような社会的ネットワークをクライアントの間に構築したか、という個別の実態を、これまで殆ど顧みられることなかった一次史料に基づいて再構築することである。またさらに、それら事例研究の積み重ねにより、枢密院と詩人との相互扶助的關係の全体像を浮かび上がらせることが究極的な構想である。

具体的には研究期間の前半において、1560年代から70年代を代表する枢密院顧問官 Nicholas Bacon の事例を中心に、パトロンとクライアントの間に庇護関係が成立する環境とプロセスに注目することである。シカゴ大学図書館及びノーフォーク古文書館が所蔵している1570年代 Bacon 家や親戚筋の関連文書を調査することで、パトロンが文人たちとどのような環境で接点を持ち、どのように庇護関係が成立し、どのくらいの期間それが継続するのか、という問題を考察するのだ。

その際、特に注目することになるのは、Nicholas Bacon が大学学寮などに対して奨学金や寄付金という形で与えた庇護の実態と、それによって形作られることになる文人のネットワークだった。シカゴ大学図書館及びノーフォーク古文書館には、Bacon がケンブリッジ大学に対して行った奨学金や寄付金の史料がある程度残されている。それらの史料を時期限定的に調査することによって、パトロンの周囲に文人クライアントが集結し、人脈ネットワークが形成され、それが継続的に維持されていく様子を比較的短い期間の調査と研究で明らかにすることができ

る。

研究機関の後半では、1570年代から80年代を代表する枢密院顧問官 Francis Walsingham の事例を中心に、パトロンがクライアントに対して行使した拘束力について注目する。具体的には、Walsingham 個人の庇護を受けていたことが判明している Thomas Watson と、枢密院全体の庇護を受けていたと思われる Christopher Marlowe の作品を丹念に読み解きながら、National Archive に所蔵されている State Papers の中でこれまで顧みてこられなかった史料を援用しつつ、庇護関係の恩恵と義務を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

16世紀イングランドにおける枢密院顧問官の詩人庇護を明らかにするためには、次の三つの側面からそれぞれ研究を進める必要がある。

- (1) 枢密院顧問官の庇護の対象となった詩人・劇作家の作品分析
- (2) 枢密院顧問官や詩人の庇護関係に直接関連する一次史料の調査・分析
- (3) 庇護関係のコンテクストに関する一次史料及び二次史料の調査・分析

庇護関係やネットワークに直接関連する新しい一次史料については、大学図書館や地方都市の古文書館に残されている裁判記録、会計簿、出納簿など、まだ手の付けられていない様々なタイプの史料を初年度から最終年度に至るまで調査し続ける。勿論、こうした史料は電子化されているわけでもなければ、出版物として公にされているわけでもないため、新しい史料を見つけ出すためには、実際に古文書館へ赴いて史料調査を行う他に方法はなく、そのため継続的な現地調査が必要となる。したがって初年度と次年度以降の調査対象は異なるが、比較的アクセスのしやすい史料から同時進行で調査することにした。

4. 研究成果

この研究課題では、枢密院顧問官ニコラス・ベーコンが大学学寮などに対して奨学金や寄付金という形で与えた庇護の実態と、それによって形づくられることになる文人のネットワークについての解明がなされた。

とりわけベーコンが文人クライアントを育成するためにケンブリッジのコーパス・クリスティ学寮に設けた奨学金制度に関する一次史料を基に、ベーコンが庇護した学寮の文人や詩人たちのネットワークを再構築した。その結果、ベーコンの奨学金制度設立に関する契約書や覚え書きなどの重要な史料を発見した。

これによって、従来の文学研究者が着目してこなかった人脈ネットワークの広がりや継続性、或いは詩人の創作に対する影響力を検証し、庇護制度の総体を浮き彫りにした点

が、本研究の大きな成果である。その成果は Cambridge Bibliographical Society 発行のジャーナルにおいて明らかにした。また本研究は歴史的調査手法をその土台に据え、新しい一次史料の掘り起こしに大きな比重を置いたため、これまでの文学研究ではカバーし得なかった庇護関係の実態に迫ることができたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Arata Ide, "Corpus Christi College, Cambridge in 1577: Reading the Social Space in Sir Nicholas Bacon's College Plan" *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society* XV.2 (2015), 279-328.

井出新 「シェイクスピアと「死んだ羊飼いの」『お気に召すまま』における牧歌的世界の喪失」 *Shakespeare Journal* 1 (2015), 1-13.

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井出新 (Arata Ide) (慶應義塾大学文学部教授)

研究者番号：30193460

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：